様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２００２０

研究課題名（和文）後期田辺哲学における象徴概念の研究

研究課題名（英文）The Study on the Concept of Symbol in the late Philosophy of Tanabe Hajime

研究代表者
竹花　洋佑（TAKEHANA, Yosuke）

大谷大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：６０５４９５３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：　田辺元（1885－1962）は西田幾多郎と並ぶ「京都学派」の代表的な哲学者である。しかし、西田に比べてその研究は十分に進んでいるとは言いがたい。その理由の一つとして田辺の哲学の統一的理解の難しさが挙げられる。本研究は、後期の田辺哲学において重要な役割を果たす「象徴」という概念（田辺は後年、ヴァレリーやマラルメの象徴詩の哲学的解釈を行なっている）が彼の哲学の包括的理解の鍵となると考え、田辺がなぜ象徴ということを論じなければならなかったのかという問題を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　Tanabe Hajime (1885－1962) is a philosopher who belongs to so-called “Kyoto School.” We cannot mention “Kyoto School” without taking into consideration his philosophy as well as that of Nishida Kitaro (1970-1945), who is the most famous philosopher in Japan. Compared with Nishida, however, sufficient study on Tanabe’s philosophy has not been made so far. The main reason for this is that it is very difficult to give an overall and comprehensive perspective to his philosophy. We regard as the key to solving this problem the concept of symbol, which plays an extremely significant role in his late philosophy, as we can clearly see in his interpretations on French symbolist poetry. From this point of view, in this study, we answer the question of why Tanabe considered the concept of symbol as indispensible to his own thought.

研究分野：哲学

キーワード：田辺元　西田幾多郎　京都学派　種の論理　象徴　生　　論理　図式論

１．研究開始当初の背景

京都学派の哲学は国内外の多くの研究者の関心を集め、その研究はこれまでにない活況を呈している。しかし、研究開始当初においてもまた現在においても京都学派に関する研究は基本的に西田幾多郎を中心とするものであり、田辺元を主題とした研究は数少ないという状況である。近年においては田辺哲学そのものの独自性を解明しようとする試みがなされてきているが、その研究においてはなおも大きな問題が未解明なまま残されているといえる。それは大まかにいって以下の 2 点であると考えられる。

（1）一般的に田辺の思想について最もよく知られているのは 1930 年代に彼が提唱した「種の論理」である。しかし、「種の論理」はその後国家主義的な色彩を帯びるものとなることによって挫折を余儀なくされ、そのことに対する深い反省から『懺悔道としての哲学』に代表される戦後の宗教的な哲学が展開されていく。にもかかわらず、田辺は戦後においても「種の論理」について頻繁に言及する。そうであるとすれば、「種の論理」は廃棄されていないと考えられる。しかしそれが事実だとすれば、今度は田辺が「懺悔」と呼ぶ戦前の自らの立場の自己否定のあり方が問題となる。すなわち、田辺の哲学全体において「種の論理」はどのような位置を占めているのかということが問われなければならなくなる。

（2）「懺悔」といわれる自己否定を通して成立した後期の哲学は宗教哲学と理解されることが多い。確かに後期の思想において宗教哲学的な思索が大きな比重を占めていることは事実である。しかしそのことは、田辺の関心が親鸞やキリスト教あるいは禅といった宗教思想の解釈にのみ向けられていたということを意味するわけではない。田辺は数理哲学の研究やフランスの象徴詩の解釈にも多くの精力を注いでおり、その意味で後期の思想は宗教の問題にとどまらない広がりをもつものであったといえる。しかし、これまでの研究は田辺の宗教哲学に注意が向けられたものであり[①]、それに比べて田辺の数理哲学や芸術論についての研究は数少ない[②]。

〔注〕

① このような観点からの代表的な研究としては、氷見潔『田辺哲学研究—宗教哲学の観点から』（北樹出版、1990 年）、伊藤益『愛と死の哲学 −田辺元 —』（北樹出版、2005 年）などがある。

② 田辺のマラルメ論をはじめて正面から扱った研究として、細谷昌志『田辺哲学と京都学派－認識と生』（昭和堂、2008 年）がある。

２．研究の目的

本研究は直接的には（2）の問題点に関わるものであり、後期田辺哲学の意義を宗教哲学という角度とは別の新たな視点から照射することを目指すものである。しかし、それは（1）についての問題、すなわち田辺の哲学に対する「種の論理」の意味についての問いと切り離されたかたちでなされるわけではない。もし本研究が前期の思想と後期のそれとの非連続性にのみ注目する理解に基づいてなされるならば、「種の論理」は結局のところ「挫折」という仕方でのみ後期の宗教思想と関連をもつものとして捉えられることになってしまう。問題は、こうした「種の論理」の意義の否定的・消極的な把握に陥ることなく、いかにして後期の思想の意味を積極的に捉えることができるのかということである。そのためには、前期と後期の思想とを連続性においても把握することを可能とする視点が必要である。その視点こそ本研究が田辺解釈の中心概念として設定する象徴に他ならない。この概念が前後期の思想の連続性を捉える観点となりうる理由は二つある。第一に、田辺哲学の基本的立場である「絶対

媒介の論理」において決定的な役割を果たしている否定的媒介性に配当されているものが、前期においては「種の論理」の種であり、後期においては象徴であるという事実が挙げられる。また、田辺は象徴という概念を常に表現との対比で用い、後者の立場を超えるものとして前者の意義を語る。この場合、表現は生の立場とも捉えられるが、後期において特に強調される表現＝生の立場の乗り越えという視点はそもそも「種の論理」が保持していたものである。したがって、表現＝生に対する批判という観点で「種の論理」と象徴の問題がつながることになる。これが第二の理由である。

３．研究の方法

田辺の文章は極めて抽象度が高く晦渋であり、具体的な例示がほとんど示されていない。同時代の日本の哲学者と比べても田辺の文体の抽象度は突出している。また叙述の論理展開そのものはつかむことができたとしても、それがどのような具体的な問題に肉薄しようとしたものであるのかを捉えることは容易ではない。したがって、テクストの読解に際しては田辺の主張をどれだけ具体的なイメージに置きかえた上で理解することができるのかが鍵となるが、その際テクスト研究において一般的に用いられているクロスリファレンスという方法を徹底した仕方で用いることが有効であると考えられる。というのも、田辺は自らが参照する文献で語られている具体例を前提として自説を展開している場合が多く、田辺の真意を理解するためには、テクスト上には直接現われてこない田辺のイメージを彼が参考にしている文献にまでさかのぼって捉えることが必要だからである。

４．研究成果

本研究を通して得られた成果とその意義は以下の三点にまとめることができる。

（1）田辺の思想形成についての研究（「田辺元の思想形成と『永遠の今』―微分から瞬間へ―」）。「西田先生の教を仰ぐ」（1930 年）において、西田幾多郎の「絶対無」の概念を厳しく批判した田辺が、なぜその後「絶対無」という発想を自らの思索の中に取り入れるようになったのかという問いを、田辺の思想におけるコーヘン、シェリングおよび西田の影響との関係で明らかにし、「絶対的なもの」のあり方が微分から瞬間へと捉え返された点に、「無」の概念の積極的受容の根拠があることを論じた。田辺の思想形成になぜ「絶対無」という概念が必要だったのかという問いは必ずしもこれまで明確にされてこなかったと思われるが、本研究を通してその問題が明らかになったと考える。

（2）「種の論理」の意味をめぐる研究（「『種の論理』の基本構造とその展開−「種」概念の修正の意味をめぐって」、“The Logic of the Transcendence of Life — Tanabe’s Theory of ‘World Schema’ and Miki’s ‘Logic of the Imagination’ — ”）。「種の論理」についての詳細な発展史的・内在的研究は未だ数が少なく、その数少ない研究においても「種」概念の修正について（「種」の自己否定性という概念が中心的問題となる）論じたものは少ない。本研究ではその意味を田辺の数学における連続の問題に対する哲学的アプローチの観点から明らかにした。また、後者の“The Logic of the Transcendence of Life”においては「種の論理」の意図およびその構造を「世界図式論」という観点から取り上げ、ハイデガーに対する共鳴と批判という地盤においてそれが三木清の哲学と親近性をもつことを論じた。田辺哲学と三木清の思想の共通性を論じた研究はほとんどないので、本研究は今後の京都学派研究に新たな視点を提供し

うるものであると思われる。

(3)「種の論理」と象徴の概念をめぐる研究(「生と論理―西田の田辺批判と『種の論理』の意味―」、「田辺哲学における＜生＞の問題」、「象徴と無―田辺哲学における象徴概念の由来と意味」)。この点をめぐる研究が本研究の中心に位置する。まず、前の二つの論文および発表においては、西田による田辺の「種の論理」批判を手掛かりとして、西田と田辺両者における「論理的なもの」の地盤が生にあることを論じ、その上で西田の“生の論理”が生命の表現としての論理であるのに対し、田辺の“生の論理”すなわち「種の論理」が生を否定的媒介性と捉える論理であることを明確にした。このように、表現の論理ではない仕方で生の論理を追求するという発想が田辺において象徴という概念が浮かび上がった背景にある。そして、「象徴と無」においては、表現概念への批判がなぜ象徴というかたちで考えられたのかを、当時の日本の哲学における象徴論(波多野精一および高山岩男)との関係で捉え、後期における象徴概念の本質が「＜無いもの／こと＞の現われ」として理解できることを明確にした。田辺とフランス象徴詩との関わりという問題については今後ますます議論が盛んになっていくと思われるが、その際にはそもそもなぜ田辺が象徴という概念を自らの思索に取り入れなければならなかったのかという問いは欠くことはできないと思われる。本研究はこの問いを明らかにしたものとして、今後の田辺哲学の基礎研究としての役割を果たしうると考えている。

今後の研究の課題としては、まずは本研究を通して明らかとなった成果を論文として公にしていくことが必要であるが、さらに田辺のヴァレリー論、マラルメ論についての研究を本研究におけるように発展史的な観点からだけではなく、ヴァレリーやマラルメに対する研究史をふまえてより内在的に行なっていきたい。さらに、「＜無いもの／こと＞の現われ」としての象徴概念のもつ哲学的な意味を、＜ハイデガー―レヴィナス＞関係とのつながりで明確にしていきたいと考えている。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

(1) 竹花 洋佑、「生と論理―西田の田辺批判と『種の論理』の意味―」、査読有、『日本の哲学』第14号、日本哲学史フォーラム編、昭和堂、2013年、45-61頁。

(2) 竹花 洋佑、「田辺元の思想形成と『永遠の今』―微分から瞬間へ―」、査読有、『日本の哲学』第 13 号、日本哲学史フォーラム編、昭和堂、2012 年、102-127 頁。

〔学会発表〕(計 4 件)

(1) 竹花 洋佑、「象徴と無―田辺哲学における象徴概念の由来と意味」、第2回田辺哲学シンポジウム、2014年8月27日、北海道大学(北海道札幌市)。

(2) 竹花 洋佑、「田辺哲学における＜生＞の問題」、第１回田辺哲学シンポジウム、2013年9月27日、北海道大学(北海道札幌市)。

(3) 竹花 洋佑、「生と論理―西田の田辺批判と『種の論理』の意味―」、土井道子記念京都哲学基金主催シンポジウム「近代日本哲学と論理」、2012 年 12 月 21 日、京都ガーデンパレスホテル(京都府京都市)。

(4) 竹花 洋佑、「『種の論理』の基本構造とその展開 ―「種」概念の修正の意味をめぐって」、第 23 回日本哲学史フォーラム、2012

年 7 月 14 日、京都大学（京都府京都市）。

〔図書〕（計 2 件）

（1）TAKEHANA Yosuke 他, *Global East Asia*（仮題）, “The Logic of the Transcendence of Life — Tanabe’s Theory of ‘World Schema’ and Miki’s ‘Logic of the Imagination’ — ”, V&R Unipress, 2015, 印刷中.

（2）野家啓一監修、林永強・張政遠編（竹花洋佑他訳）、『日本哲学の多様性』、世界思想社、2012 年、「実践概念のオルタナティブとしての『行』―日本哲学の将来性という視点から」（ジョン・C・マラルド、竹花洋佑訳）・2–22 頁、「グローバルとローカルの間で―グローバル時代における『一即多』の可能性」（ゲレオン・コプフ、竹花洋佑訳）・64–81 頁。

６．研究組織

（1）研究代表者

竹花 洋佑（TAKEHANA, Yosuke）
大谷大学・文学部・非常勤講師
研究者番号： 60549533